

ウイグル語における動詞の"-i)p"形の並列

藤家洋昭(大阪大学) Reyihan Pataer (甲南女子大学)

1. はじめに

ウイグル語 (Uyghur Tili) は、基本語順が SOV (主語-目的語-述語) で、形態的にはこう着語に分類できる言語である。

ウイグル語には動詞語幹に *-(i)p* という形式がついた形がある。本研究ではこの形のことを *-(i)p* 形と呼ぶことにすると、*-(i)p* 形を用いて節を並べることができる。*-(i)p* 形を用いて並列されたものが、どのような統語的あるいは意味的性質をもっているかは、これまでほとんど研究されてこなかった。そこで本研究では、*-(i)p* 形で並列されるものが、何の制限もなくどのようなものでも並列されるのか、あるいは制限があるのか、あるとしたらどのような制限であるかを明らかにし、記述して形式化することを目的とする。

2. データ

2.1 *-(i)p* 形

まず、本研究の中心である *-(i)p* 形について簡単にみておく。

-(i)p 形は、連用形[4]、ウイグル語では *rewishdash*[1][2] と呼ばれるのもので、日本語の動詞の「食べて」「飲んで」などのいわゆるテ形に似たところがある。ウイグル語は人称を表す形式が発達した言語であるが、*-(i)p* 形には人称を表す形式がつかない。また、テンスを表す形式につくこともない。基本的に *-(i)p* 形で文を終えることができず、「*-(i)p* ... 定形 (終止形) の動詞」という形の文型をとる。ここでいう定形 (終止形) とは、過去形、現在形などと呼ばれているものの総称であり、次節以下で示す例では「現在」「過去」と記す。*-(i)p* は、前に来る動詞 (語幹) の音韻的な違いによっ

て、*-p ~ -ip ~ -üp ~ -up* という形で実現する。

2.2 具体例

2.2.1 *-(i)p* 形の生起の数

文末の定形の動詞 (以下、定形動詞と呼ぶ) の前に *-(i)p* 形が来るわけであるが、その数は一つに限られるのだろうか。本節では、*-(i)p* 形の生起の数に制限があるかどうかを見る。

(1) *Men bögün kütüpxanigha bérip ete doxturxanigha barimen.*

私・今日・図書館へ・行く(*-(i)p*)・明日・病院へ・行く (現在)「私は今日図書館へ行って明日病院へ行く。」

(2) *Men bögün kütüpxanigha bérip ete doxturxanigha bérip ögünlükke pochtxanigha barimen.*

私・今日・図書館へ・行く(*-(i)p*)・明日・病院へ・行く(*-(i)p*)・あさって・郵便局へ・行く (現在)「私は今日図書館へ行って明日病院へ行ってあさって郵便局へ行く。」

(3) *Men bögün kütüpxanigha bérip ete doxturxanigha bérip ögünlükke pochtxanigha bérip kéler heptide ashxanigha barimen.*

私・今日・図書館へ・行く(*-(i)p*)・明日・病院へ・行く(*-(i)p*)・あさって・郵便局へ・行く(*-(i)p*)・来週・レストランへ・行く (現在)「私は今日図書館へ行って明日病院へ行ってあさって郵便局へ行って来週レストランへ行く。」

(4) *Men bögün kütüpxanigha bérip ete doxturxanigha bérip ögünlükke pochtxanigha bérip kéler heptide ashxanigha bérip 2 heptidin kéyin ...*

私・今日・図書館へ・行く(*-(i)p*)・明日・病院へ・行く(*-(i)p*)・あさって・郵便局へ・行く(*-(i)p*)・来週・レストランへ・行く(*-(i)p*)・2・週・後...「私は今日図書館へ行って明日病院へ行ってあさって

郵便局へ行って来週レストランへ行って2週間後...」

物理的な制約等により、現実には無限ということはないが、-(i)p形の生起の数に特に制限はない。

2.2.2 -(i)pの前に来る動詞（語幹）

2.2.1 で見た例では、動詞がすべて同じbar-「行く」であった。並列される動詞はすべて同じである必要があるのだろうか。

(5) Men shenbe küni naxsha éytip yekshenbe küni usul oynap düshenbe küni kitap oquymen.

私・土曜・日に・歌・歌う(-(i)p)・日曜・日に・おどり・おどる(-(i)p)・月曜・日に・本・読む（現在）「私は土曜日に歌を歌って日曜日におどりをおどって月曜日に本を読む。」

並列される動詞は同じである必要はない。

2.2.3 -(i)p形の主語

-(i)p形は動詞であるので、明示的であるかどうかにかかわらず主語がある。その主語が、並列された複数の-(i)p形、文末の定形動詞との間でどのような関係にあるか、すなわち主語が同じである必要があるのか、あるいは独自の主語がたつことが可能であるかを見てみる。並列された-(i)p形に制限があるかどうかを別の主語をたてて容認性を見る。

(6) Tursun kütüpxaniga bérip men pochtixanigha bardim.

トルスン(人名)・図書館へ・行く(-(i)p)・私・郵便局へ・行く（過去）「トルスンは図書館へ行って私は郵便局へ行った。」

(7) Tursun naxsha éytip Gülnar usul oynidi.

トルスン・歌・歌う(-(i)p)・ギュルナル(人名)・おどり・おどる（過去）「トルスンは歌を歌ってギュルナルはおどりをおどった。」

(8) Tursun naxsha éytip Gülnar usul oynap men kitap oqudum.

トルスン・歌・歌う(-(i)p)・ギュルナル(人名)・おどり・おどる(-(i)p)・私・本・読む（過去）「トルスンは歌を歌ってギュルナルはおどりをおどって私は本を読

んだ。」

複数並列された各-(i)p形、-(i)p形と文末の定形動詞の主語は同じである必要はない。

2.2.4 -(i)p形のテンス

ウイグル語は、テンスの違いを定形動詞では形の違いとして明確に区別する。例えば、現在形と過去形は対立をなし、前者は「動詞語幹+i/y+人称」、後者は「動詞語幹+di+人称」という形をとる。これらは、意味が矛盾する副詞的修飾語と共起することができない。例えば、過去のことを表す、tünügün「昨日」は、現在形と共起することができない。

(9) *Tünügün kütüpxanigha barimen.

昨日・図書館へ・行く（現在）

未来のことを表す ete「明日」は、過去形と共起することができない。

(10) *Ete kütüpxanigha bardim.

明日・図書館へ・行く（過去）

-(i)p形そのものは、テンスを表す形を持ってないが、テンスと無関係なのだろうか。ここでは、時間を表す副詞的修飾語との共起関係をもとに、-(i)p形のテンスをさぐる。

なお、bügün「今日」は、意味的に幅があり、発話時との関係で、過去にも未来にも解釈できる。例えば、発話時がお昼でその日の朝行ったことを、

(11) Bügün kütüpxanigha bardim.

今日・図書館へ・行く（過去）「今日図書館へ行った。」

と言っても矛盾しないし、その日の夕方行くことを

(12) Bügün kütüpxanigha barimen.

今日・図書館へ・行く（現在）「今日図書館へ行く。」

と言っても矛盾しない。

以下、-(i)p形との共起を見ていく。

(13) Men tünügün kütüpxanigha bérip bügün pochtixanigha bardim.

私・昨日・図書館へ・行く(-(i)p)・今日・郵便局へ・行く（過去）「私は昨日図書館へ行って今日郵便局へ行った。」

(14) Men bügün pochtixanigha bérip ete doxturxanigha barimen.

私・今日・郵便局へ・行く(-(i)p)・明日・

病院へ・行く（現在）「私は今日郵便局へ行って明日病院へ行く。」

(15) Tursun tünügün kütüpxanigha béríp Gülnar bögün pochtxanigha bardı.

トルスン（人名）・昨日・図書館へ・行く(-i)p)・ギュルナル（人名）・今日・郵便局へ・行く（過去）「トルスは昨日図書館へ行ってギュルナルは今日郵便局へ行った。」

(16) Tursun bögün kütüpxanigha béríp Gülnar ete pochtxanigha barıdu.

トルスン・今日・図書館へ・行く(-i)p)・ギュルナル・明日・郵便局へ・行く（現在）「トルスは今日図書館へ行ってギュルナルは明日郵便局へ行く。」

(17) *Men tünügün kütüpxanigha béríp ete doxturxanigha barımen.

私・昨日・図書館へ・行く(-i)p)・明日・病院へ・行く（現在）

(18) *Tursun tünügün pochtxanigha béríp Gülnar ete kütüpxanigha barıdu.

トルスン・昨日・郵便局へ・行く(-i)p)・ギュルナル・明日・図書館へ・行く（現在）

以上のことから、-i)p 形のテンスは文末の定形動詞のテンスと一致する必要があることがわかる。

3. 考察

前章でみたデータからわかることは次の点である。

- ・-i)p 形は複数生起することができる。
- ・並列される動詞は同じである必要はない。
- ・-i)p 形の主語は同じである必要はない。
- ・-i)p 形のテンスは文末の定形動詞のテンスと一致する必要がある。

4. 分析

4.1 分析の枠組み

本研究では分析の枠組みに HPSG (=Head-driven Phrase Structure Grammar: 主辞駆動句構造文法) [3]を用いる。分析の前提として、本研究では、SEM に TENSE を仮定し、TENSE に PRES と PAST という素性を仮定している。

4.2.1 -i)p 形の範疇

まず問題になるのは-i)p 形の範疇である。考え方として、-i)p 形が動詞の活用形のひとつとするものと、-i)p が主辞で動詞を補部にとるとするものの二つがありうる。

本研究が立脚している立場（語彙主義）の主張のひとつに、語が最小単位で、語をむやみに語以下の単位、すなわち拘束形式に切らない、ということがある。もっとも拘束形式を主辞とすることを完全に否定するわけではない。例えば、英語の所有を表す "s" が主辞であるとする分析は否定しない。しかし、-i)p を主辞にした方が有利であることを示すデータもこれまでのところ発見されていない。したがって-i)p 形をいわゆる活用形のひとつとして扱うことにし、これを形式化すると、VP[FORM -i)p]ということになる。

4.2.2 文末の定形動詞との関係

2章でみたように、-i)p 形からなる動詞句は、文末の定形動詞とテンスが同じである必要があり、完全に独立して並列しているわけではない。したがって、"-i)p" ... "ip" "文末の定形動詞" が対等の関係であるとするのは適当ではなく、文末の定形動詞との関係は、主辞構造を持つ関係であると考えられる。

文末の定形動詞からみると、-i)p 形は任意要素であり、いわゆる項ではない。項ではないから文末の定形動詞が語彙として持つ情報だけでは -i)p 形を複数持つ構造を生成することができない。記述する方法の一つとして、新たな句構造規則をたてて、

$S \rightarrow VP[FORM -i)p]^+ VP[FORM fin]$

などとするやり方もありえようが、文型ごとに個別の規則をたてることは好ましいことではない。

以上のことから、-i)p 形を先行研究[3]で示されている MOD 素性を用い、MOD 素性持つものとして分析し、VP[MOD [VP [FORM fin]]]とする。さらにまた、-i)p 形のテンスが文末の定形動詞のテ

ンスと同じであることを保証する必要がある。このために、MOD が指定している VP の TENSE 値と-(i)p 形の TENSE 値が単一化するとする。

-(i)p 形が複数共起できる点については、先行研究[3]で示されている等位構造規則を用いることで記述できる。ただし、ウイグル語では、一般に、等位接続詞を必要としないので、

$\boxed{1} \rightarrow \boxed{1}^+$

のように修正する。

4.3 まとめ

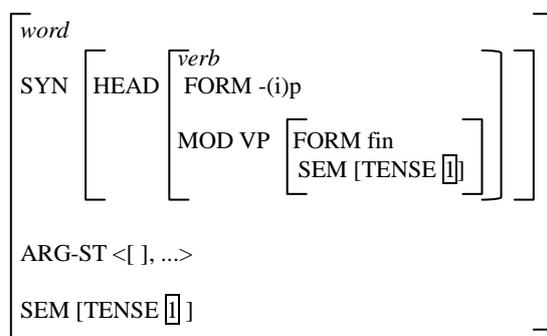
以上の分析の結果、-(i)p 形は、FORM -(i)p、MOD [VP fin] であり、-(i)p 形の TENSE 値と MOD が指定している VP の TENSE 値が単一化する、と結論づけることができる。

5. 結論

本研究により、-(i)p 形の並列を明らかにし記述することができた。

4 の分析により、次のような語彙項目が得られる。

-(i)p



参考文献

- [1] Arslan Abdulla (ed.). (2010). *Hazirqi Zaman Uyghur Tili*. Ürümchi. Shinjang Xelq Neshriyati.
- [2] Arziyev R. (2006). *Uyghur Tili*. Almuta. Mektep.
- [3] Sag I. A. & Wasow T. (1999). *Syntactic Theory: A Formal Introduction*. CSLI.

[4] 竹内和夫 (1991). 『現代ウイグル語四週間』 大学書林.